

ホトトギス

十二月号

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特別取扱承認証第六二七号
平成二十三年十二月一日発行(第四十四巻第二号)



俳句随想 〔三百五十四〕

汀子

俳句は短い詩である。言いたい事があつても何程のことも言えない。十七文字の中に詰め込めば詰め込むほど散漫になり余韻のない乾いた感想に終つてしまう。であるから、省略ということがとても大事になつてくる。長年俳句に親しみ、俳句を詠み、俳句を選んでくると、一句の余韻から伝わつて来るものが作者と読者の心が通い合う絆の役目を果たすようになる。大した事を言つてないのに何故様々な想像が一句から沸き上がつて来るのであろうか。それが短詩形の素晴らしさであり難しさなのである。虚子の名句に「白牡丹といふといへども紅ほのか」がある。名句があるとそれを越えた牡丹の句は中々出来ない。

今年の日本伝統俳句協会全国俳句大会の募集句六千余句の中から大会大賞に選ばれた秀句は牡丹の句であつた。「牡丹の風とも風の牡丹とも 辻美彌子」。虚子の句は色が主体となつているが、牡丹の動き香りも伝わってくる。大賞の句も余韻として牡丹の華やぎと甘い香りを風が見事に伝えている。それらは全て単純な描写によつて語られ、その部分から余韻として伝えるという俳句の極意が余すところなく発揮された。

この句は選者の三人が特選に選び、二人が入選に選んでゐる。

旬日記

汀子

平成二十二年十二月四日 芦屋赤トギス会

太陽を大地に招く冬木かな
短日の風荒るる日の空の旅
燒藪を急いで食べること勿れ
恒例の焚火の準備して旅に
十二月五日 下萌句会

後ろから前から咳の旅路かな
見るための落葉を掃かずあることも
落葉にも見頃といふがあらし庭
十二月六日 ロイヤル俳壇

顔見世の話題集めてゐる役者
掃き寄せるもの啄んで冬の鳥
初雪の消息山を降りて来し
又一人偲ぶことより年惜む
咳き込んで次の言葉を失へり
十二月七日 有恒倶楽部

翳る赤日当る紅も苑の冬
笹鳴きてゐると気づきしよりのこと
露寒の風音連れて巡る苑
あるやうで無き短日の太陽よ
金星に何かはじまる冬の朝

冬紅葉誘ふ水面のありしこと
十二月七日 無名会

一片をこぼしてゆきし時雨雲
短日の予定加はり来しままに
冬霞浪速は川の多き街
短日の次の会へと急ぎけり
六甲の山遠ざかる冬霞
十二月七日 忘年句会

暮れて着く会落着きぬ日短か
やうやくに銀杏落葉の道に出し
十二月九日 清交社

句碑除幕ありし一劃年の暮
句碑除幕てふ華やぎも年の暮
花束を抱けば寒さのなかりけり
華やぎをさそふしぐれとなつて止む
散るものを散らし孤高となる冬木
鴨の陣沈む夕日に染まりゆく
さつきまで時雨をりしが祝ぎの晴
由緒ある宮に句碑建つ年の暮
十二月十日 工業倶楽部

人恋しかりしや笹子近かりし
話題又戻りし時代漱石忌
その頃の話題集めし漱石忌
冬ざれを風情としたる手入かな
十二月十四日 大阪倶楽部

短日や事故渋滞といふ表示
どうしても寄らねばならぬ日短
遅るるもみな短日のせめにして
雑炊に火を入れてもう一と仕事
彩りを地に移したる冬木立
六甲の稜線模糊と冬霞
十二月十四日 綿業倶楽部

冷たしと云ひ痛してふ指の先
初雪や街より見えぬ消息も
これよりの時間刻々年惜む
十二月十五日 夏潮句会

吉野よりもたらされたる葛湯とて
庭に出てすぐ引返す寒さかな
暖房の部屋にとどまる人ばかり
太陽の傾きそめし樞紅葉
俯瞰して居りし二階に寒さなく
冬の星弾む話題もよべのこと
十二月十七日 俳句王国吟行

息白く弾む声より初対面
十二月二十四日 時雨句会

彩りを大地に移し冬木立
朝の間の時間やりくりクリスマス
気づきたるとき隙間風なりしかな
庭といふ居間のつづきの冬木立
ひと仕事もうひと仕事隙間風

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年十二月二日 蕉心会

黄落やえうちゑん児のおままごと
花八手景に溶け込むてふ主張
やつとこさを尽して冬紅葉
冬帝は待機上空千メートル
竹箒 四十五度に落葉搔
落葉掃かないで俳句を作るから
山茶花の目立ちたがつてゐる白さ
山茶花やちよつと白過ぎるんとちやふ
十二月四日 虚子記念文学館週会
蕪村忌や京の雨とははんなりと
碧梧桐虚子居て蕪村忌の狭庭
蕪村忌や錦市場に人溢れ
蕪村忌や与謝に句碑建つ話など
十二月五日 野分会音屋例会
何となく猫も数へ日知るやうな
雪吊に万有引力一寸邪魔
十二月六日 はせを句会
古書店の隅に果てたる青写真
梟の二十五時てふ目覚かな
電波塔少し伸びたる神迎

十二月七日 カトリック新聞選者吟

スータンの手に映ゆポインセチアかな

十二月九日 土筆会

初氷子等の遊び場減りにけり

日輪に仕上げられたる冬田かな

十二月十日 六甲会

太陽の黒点目差す冬木の芽

電球にがんじがらめの冬木の芽

ビル風に冬芽研がれてゆきにけり

未来ある君に焚火の秀の高く

消防車二台侍らせ川焚火

白銀の精触れてゆく冬木の芽

焚火焚く人類ここに誕生す

汀子邸とは冬芽にも詩心

十二月十日 虚子記念文学館投句

写生文出す話など日向ぼこ

十二月十二日 「さわらび」七五〇号記念句会

冬うらら禁酒解く日を夢に見て

神苑の落葉搔く音にも祝意

三代の躍動確と冬ぬくし

十二月十三日 朝日カルチャー若草句会

寒禽の声にビル街縮みゆく

黄落を雨輝かせぬる街路

冬帝の使者本降りとなりにけり

有明の未来語る目冬ぬくし

五時間の車窓富士嵌め時雨嵌め

十二月十六日 登高会

騙されてみたい狐と君の嘘

虚子の句をもて古曆をさめけり
古曆まだ中心にある厨
寄鍋の蓋が躍れば箸騒ぐ

十二月十日 「田鶴」近詠出句

類被昔も今も帰り道

冬田今土黒々と生きかへる

初氷風に解けてゆきにけり

頬被しばれるといふ言の葉に

冬桜精一杯の白さかな

十二月十一日 草木瓜会

白きもの妖精めきて冬の雨

寄鍋の海老赤々と煮え過ぎて

寄鍋に視線迷うてをりにけり

天帝の涙とも見ゆ冬の雨

十二月十一日 目黒文学園句会

東京都目黒区色の枯木立

子規の世の蕪村忌セピア色の夢

蕪村忌の写真明治のホトトギス

枯木立風に奏でるフーガかな

十二月十三日 野分会東京例会

雪吊の縄百本にある靈気

十二月十四日 若水句会

日向ぼこめく陸橋の高さかな

冬うららオリンピックのありし街

数へ日や仕事十指に余るほど

若者の街行年といふ静寂

十二月十七日 カトリック新聞選者吟

寒灯を足して祝はる聖家族

雑詠

廣太郎 選

香水といふ雑音やコンサート 神戸 長山あや
 花びらのごとひとひらのあらひかな 同
 一匙のV S O P 暑氣払ひ 同
 日本人四人の街の花見かな 瑞安 小川龍雄
 住み古りて来たる異国に臚月 同
 春愁や一時帰国は取り止め 同
 じやんけんの拳日焼をしてをりぬ 芦屋 黒川悦子
 叡山へ続く浦道湖晩夏 同
 経堂に立ち込む黴の香に拝す 同
 淡海以て近江涼しくしてをりぬ 奈良 古賀しづれ
 百の窓百の大琵琶避暑ホテル 同
 ヨットレースてふ大琵琶の格闘技 同
 父の日や銅像の父朝日浴び 東京 大久保白村
 父の日や煙草も酒もやめられず 同
 父の日も家では煙草吸へぬ父 同
 雲の峰海一枚を鏡とし 神戸 山田佳乃
 青田風湖国豊かな水引いて 同
 月鉾の雲曳きてくる高さかな 同

大阪を離るる友と鱧尽くし 同 日下徳一
 こいさんの船場言葉や鱧の店 同
 鱧食うて宵の新地で別れけり 同
 暮れてより波音高し夏の月 龍ヶ崎 今橋真理子
 南国の夜をマンガリしたたらせ 同
 銀漢を我も一粒となり仰ぐ 同
 蜘蛛の巣に我はモスラとなりて立つ 静岡 須藤常央
 神に酒仏にメロン供へけり 同
 君知るや燃ゆるハイビスカスの夜 同
 炎帝の機嫌もつとも良き日かな 東京 橋本くに彦
 ひとところミュートの効いた蟬時雨 同
 ハース版ノヴァーク版の蟬時雨 同
 政治家の笑まふポスター五月雨 徳島 岩田公次
 蠅叩昭和の暮しありにけり 同
 東京の坂見上げぬる暑さかな 同
 そよりとせぬ夏草でありにけり 熊本 岩岡中正
 幹の中から涼風が吹いてくる 同
 いつ来ても同じ掛軸鰻宿 同
 虚子偲びつどふ面々露涼し 京都 安原 葉
 星空にナイター明り浮くところ 同
 海の日に縁なき老の畑仕事 同
 余りにも北海道の涼しさに 東京 河野美奇
 空港は早や秋近き草のいろ 同
 睡蓮に沼ふところの静寂かな 同

雑詠句評（十一月号より）

美 奇・とほ歩・むつみ
千鶴子・葉 憲 明
静 龍・保 佳・中 正
眞理子・廣太郎

茅葺のくらしのちらと夏座敷 福知山 吉田節子

茅葺の家の夏座敷とあれば障子や襖を取り払い、簾戸をはめたり、葭衝立を置くなど、よく風の通るように設えてあるだろう。そして、そこに暮らす人の起居などがちらりと垣間見えるのだ。日本の原風景の一つである茅葺の家は現在ほとんど無くなっている。岐阜県白川村や福島県下郷町、今年六月、筆者も尋ねた京都府美山町など「重要伝統的建造物群保存地区」として大切にされている。

懐かしい、心安らぐ景の一瞬を捉えられた、やわらかく余韻の

深いお句である。（美奇）

恐らく、先頃行われた北近畿ホトトギス俳句大会で吟行した京都の美山町という、茅葺屋根の家が多く残った集落を詠まれた句であろう。日本の原風景とも言える。大自然と調和した生活を垣間見て、一種の懐かしさも感じられたのであろう。何といっても「夏座敷」の風情が感じられる。（廣太郎）

筍や大きく貰ひ小さく煮る 龍ヶ崎 今橋眞理子

筍。初夏、五月の季節。先端が土から出るか出ないかの内に、掘り当てる様な小さいものでも、その大きさは掌に余るであろう。さて掲句。貰った筍を目の前にして、どう料理しようか……。食べやすい大きさに切られ、煮られて皿に盛ってみると、あんなに大きかったものが、こんなに……と言う感慨が見てとれる。小さく煮られてはいるが、料理される前の筍、皮に包まれた一本の筍の大きさが目に浮かんでくる句である。（とほ歩）

貰いものの「筍」は、結構大きな物が多いが、いざ調理をする段階になると、皮を剥けども剥けどもなかなか食べられる箇所が出て来ずに、結局小さくなってしまふ、という物も珍しくない。又、そうでなくても、調理する時には、適当な大きさに切りもする。大小の対比が面白い。（廣太郎）（以下略）

天地有情

目の遣り場なき震災の街薄暑
涙腺の緩みし海の夕焼けて
豪雪の里にもめぐり来し五月
山背吹くここらは越の米どころ
藻の花を咲かせ茅葺屋根の里
はんなりとこいさん薫風と来はる
槍恋ひし穂高恋ひしと登山地
登山地 図お花畠を鏤めて
踏み入れば露の涼しさ毀れさう
形代の流れに瀬音なかりけり
万緑や底をひとすぢ利根運河
図書館の高窓明り森涼し
原爆忌その閃光をしかと見し
ここからが家まで上り白木樅
中空に紅失したる夏の月
梅雨の月己が所在の雲明り
咲き満てる鬱金桜の陰日向
風過ぎしあと牡丹の匂ひくる

仙台 小島左京
同
京都 安原 葉
同
東京 稲畑廣太郎
同
神戸 後藤比奈夫
同
いわき 志賀青柿
同
千葉 大木さつき
同
東京 今井千鶴子
同
樺原 稲岡 長
同
徳島 上崎暮潮
同

朝虹のサンテグジュペリてふ空港
ノアの見し虹はかくやとばかり祭
大方は故人の匂集曝しけり
この面の小春心をあけくれに
貧しさのゆゑの信心麦熟るる
人生のごとくに破れし芭蕉かな
滴りとなりゆく一部始終かな
咲き継いでまた散り継いで仏桑花
蝦夷までの雲海の下地震の地も
夕虹の消えしばらくは沼明り
秋草といふほかはなきか細さよ
あかときの一ト降りに秋忍び寄る
一つ灯に二人の読書夜の秋
またひとつ灯の消え軽井沢初秋
日本に言の葉ありて涼しけれ
合歡咲けば思ひ遙かでありにけり
寄り添へる巴の塚も夏木蔭
迂るかに湖渡り来る風涼し

東京 田治 紫
同
福山 竹下陶子
同
熊本 岩岡中正
同
箕面 井上浩一郎
同
東京 河野美奇
同
神戸 三村純也
同
同 長山あや
同
大阪 佐土井智津子
同
吹田 宮崎 正
同

巴子選

天地有情句評

汀子

若いころ親しんだ登山を地図に追う郷愁の思い。

形代の流れに瀬音なかりけり

いわき

志賀青柿

流れてゆく形代に心を置いている作者。

涙腺の緩みし海の夕焼けて

仙台

小島左京

苛酷な自然災害の後の夕焼の美しさ。一層悲しい。

利根川に注ぐ運河の道筋を知って。

万緑や底をひとすぢ利根運河

千葉

大木さつき

豪雪の里にもめぐり来し五月

京都

安原 葉

ここからが家まで上り白木槿

東京

今井千鶴子

ようやく初夏の快晴に慰められる雪国。

高台にあるわが家。

藻の花を咲かせ茅葺屋根の里

東京

稲畑廣太郎

梅雨の月己が所在の雲明り

樺原

稲岡 長

昔の暮しを大切にしている里を訪ねて。

雲間に見届けた梅雨の月の所在。(以下略)

槍恋ひし穂高恋ひしと登山地図

神戸

後藤比奈夫